

論文

武士道思想における死生観に関する一考察

——戦国期の天下人の神格化を中心に——

A consideration about the view of life and death in Bushido thought: Focusing on “Deification”

高瀬 武志

桐蔭横浜大学法学部

(2017年9月28日 受理)

I. はじめに

本論は、桐蔭論叢 35号に掲載されている拙著の論文における研究テーマの継続したものである。

日本には、古来より「道」という概念がある。武道はもとより、茶道・華道・書道といった文化的営みにまでその概念は浸透している。「道」という概念を定義づけることは容易ではないが、広義に解釈すると「人の進むあり方。人の行為・生き方について規範とすべき筋¹⁾」とあり、さらに詳細な事項は以下に列記する。

- ①そのものの分、または定めとして、よりしたかわねばならぬ筋。また、物事が必然的に成り行く筋、ことわり²⁾
- ②神仏、聖賢などが示した道。神仏、聖賢の教え。教義。教理³⁾
- ③事をなすにあたってとるべきでだて。手段。方法。やり方。特に、正当な方法⁴⁾
- ④特定の方面のこと。むき。すじ。かた⁵⁾
- ⑤特に、専門の方面。専門的な方法。学問、

芸能、美術、技術などの専門の分野。中世以後、単なる技芸としてではなく、人間としての修行を目的として道という場合がある⁶⁾

- ⑥目的、結果などに至りつくべきみちすじ。到達、達成のためにふまねばならぬ過程⁷⁾

以上に記した①から⑥までの「道」の概念を念頭におきつつ、研究に着手する。

武士道思想を思想的観点から俯瞰したとき、歴史的的思想の変革期はいくつかみられるが、なかでも戦国時代末期から江戸時代初期にかけての特異性は顕著である。よって本論では研究対象とする時代を主に日本史における戦国時代末期から江戸時代初期までとする。研究対象とする主な人物・思想を天下人（織田信長・豊臣秀吉・徳川家康）の死生観とし、武士道思想にどのような影響があったのかもふまえて考察をおこなう。

研究方法は、一部考古学的手法を用いる場合があるが、基本的には研究対象である時代や人物の諸相・思想をあらわしている文献から内容や行間を読みとる、いわゆる文献学的手法を用いる。本研究で取り扱う文献史料や

参考文献、先行研究の妥当性はその都度、本論の中で述べることにする。

II. 武士の精神文化形成における構造的特徴

武士の思想或いは武士道を支える精神的支柱は、古来より祖先神や自然神を尊崇する日本に発生した民俗信仰である神道を中心とする「宗教」であるといつて大過ないと考える。これは、武士が職能的であろうとそうでなかろうと、武力を行使する或いはそういった行為を背景として自身の生活を営んでいる限り、それは常に死と生が隣り合わせの生活である。

つまり、近世江戸期以前の武士には死生の問題と自分との距離が近い。人は武士に限らず「生」の実感は毎日の営みの中から得ることが可能である。しかし、「死」は残念ながら経験的認識はできない。否、正確に言うと経験した死を他者に伝えることができない。それは、「死」を経験した後、それを他者に伝える自己はもうこの世（現世）にはいないからである。

この得体の知れない「死」に対して古来の日本人や武士は畏怖し、その畏怖からの救いや逃避を「宗教」に求めたと考えられる。これを顕著に示す例として以下の記述が挙げられる。

「与一目をふさいで、『南無八幡大菩薩、我国の神明、日光権現宇都宮、那須のゆぜん大明神、願くはあの扇のまなかみさせてたばせ給へ。是をるそんずる物ならば、弓きりおり自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度本国へむかへんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふな』と、心のうちに祈念して、目を見ひたれば、風もすこし吹よはり、扇もるよげにぞなたりける⁸⁾」(下線部筆者)

これは、自軍はもとより敵軍に至るまで戦中にも関わらず、称賛したと伝えられる鎌

倉初期の武士である那須与一をえがいた『平家物語』にみられる記述である。それは、源氏方へ平氏方からの「船上の扇を射てみよ」という挑発に対する場面であるが、一般人ならば断ることもできるかもしれないが、武士は断ることはできない。断れば武士の名の恥となるため、恥を拭うためには死ぬしかなく、失敗も同様である。武士は、敵方や自軍の大將から指名を受けた時点で成功させることでしか「生」への条件は残されていない。ここに一般人との違いがあり、武士の凄みが感じられる。

与一は自身の「死」を決定づけるという、扇を射損じることへの恐れやそれに伴う恥辱や死への恐怖を少しでも緩和させよう、力に代えようとする時、神に祈っている。この行為から武士における自身の武技の技術や経験を支える下層に神聖な「もの」の神意に結果を委ねる姿勢が読み取れる。注目したいのは、那須与一のような武士が、鎌倉時代における武士の理想像であったということである。

つまり、武士は集团的や個人的に関わらず、軍事力によって身をたてる者であるが、その精神を支える意識層においては、祖先神や自然神への恐れや期待が混在した形で形成されている。ここに武士の精神的構造の特徴として、宗教への精神的依存の上に武士としての職能的性格は立脚しており、武士の精神である武士道は「宗教」と意識下において深い結びつきがあるといえる。よって、武士がどのような宗教観を持つということは、その武士の生活だけでなく、その周辺も含めて大きな影響を与える事柄でもある。次章からは、武士と宗教との関わりを念頭に論をすすめたい。

III. 「天道思想」との結びつき

武士道思想における死生観の変遷を考察するにあたり、宗教との関係は切り離すことができないことは先述した事柄からも理解できる。

武士道思想にみられる宗教的背景を考察したとき、特徴として挙げられるのが、その重層性である⁹⁾。また、古来より日本人にみられる信仰上の特徴として、湯浅氏は次のように指摘している。

「過去の日本人は、古代以来の神仏習合思想や中世以降の神儒一致論などにみられるように、これらの超越的人格と日本古来の神々とは、何とはなしに重ね合わせてきたのである¹⁰⁾」

以上の指摘からも理解できるように、日本人は長い歴史の中で、外来思想が伝播してくるたびに、それまであった古い思想を捨て去るのではなく、古い思想を残しつつ、新しい思想を積み上げることによって日本独自の宗教観や信仰体系を成してきたといえる。

湯浅氏の指摘を踏まえて、日本人の信仰上の特徴を武士道思想の思想的観点にあてはめて考察をすすめる。

先にも述べたように、平安時代初期から鎌倉時代にかけて、みられた武士の思想には、宗教的背景として神道・仏教（神仏習合）・禪の影響を色濃く受けていることが理解できる。

そして、時代が下り戦国時代になると、それまでにみられた神道・仏教（神仏習合）・禪といった宗教的背景に儒教の影響も含まれるようになる。宗教的背景にあらわれる変化としては、外来思想が従来の思想のうえに積み重なるといふ変化を遂げる。戦国時代においては、特に、天道思想が戦国武将の思想と結びつく。

「天道」とは、仏教用語に由来しており、遅くとも南北朝期には広く武士の間で、神仏と同様な超越的存在としての位置づけがなされる¹¹⁾。曾根原氏は、天道思想を大別すると二つのタイプに区別されると指摘している¹²⁾。人の善悪とは関係なく、偶然的に人々に幸・不幸をもたらすものと、人の善悪に応じ、運命が左右されるとする二つの考え方である。

さらに、氏の指摘を以下に記す。

「その人が正しい心を持つか否かに応じて、天道は報いを与えるという。天道は、人々の道徳性に対応して報いを与える神としてとらえられていた。人々は、早い時期は天道の不可知の側面を意識し、良い結果に対しては天道の計らいとして感謝し、悪い結果についても運命として受け入れた。やがて時代が下ると、そうした側面は残されたものの、天道をより倫理的なものと考え、自らの道徳的行為によって好ましい結果を得ようとする傾向が強まっていった¹³⁾」

また、次のようにも指摘している。

「天道思想は、天下人たちに支配の正当性を与える役割を果たした。だが天道は、特定の政権の永続と世襲を保証するものではなかった。天道は、儒教の徳知主義の立場を基本とするため、徳を欠く上位者の打倒を正当化する一方で、自分らが、または子孫が徳を欠いた場合も同様に、より道徳性を持つ下位者に打倒される路を用意しているのである¹⁴⁾」

以上の氏の指摘からも理解できるように、天道思想は新しい秩序の形成には有効であるが、固定化には不向きであるといった、思想的特徴を有する。さらに戦国武将は室町期まで厳然として確立されていた伝統的権威を天道思想による思想的正当性を背景として下剋上という行為をもって打破し、戦乱の終結と新しい武士社会の秩序を築こうとしたと考えられる。

IV. 覇道の限界と王道への憧憬

——源平交代思想を中心に——

儒教における考え方に、覇道と王道という

考え方がある。辞書的に解釈すると、霸道とは武力・権謀を用いて国を治めることであり、王道とは古代の王者が履行した仁徳を本として国を治めることである。つまり、圧倒的な武力などの世俗的な権力を誇示して支配する武士の支配スタイルは霸道であるといえる。

一方、日本にはもう一つの支配スタイルが存在する。それは天皇を中心とするシャーマニズム (shamanism) といった宗教的権威を誇示する支配スタイルであり、これを霸道に対して王道と捉えることができる。

古来、天皇が権威と権力を保有し、世を治めていたが、武士が台頭し徐々に武力を高めていくことによって、天皇が最有力な武士に征夷大將軍を任ずるという形式をもって、武士が権力 (武力) を天皇から奪いとることになった。しかし、権力で支配する統治スタイルはその支配基盤をなすものが武力であり、非常に不安定である。特に、戦国時代の武将たちは長く続く戦乱と下剋上の風潮から武力のみをもって支配する霸道とよばれる統治スタイルへの短命性と限界を感じていたと考えられる。そこで武士が求めたものは、天皇の持つ「神聖性」である。つまり権力と権威の両方を掌握しようと考えたのである。これを源平交代思想¹⁵⁾から読みとることができる。(表1)

天皇の勅命による皇族の「臣籍降下」によって誕生した源平二氏には、同じ武士の中でも特別な権威を有する。それは天皇の持つ「神聖性」であると考えられる。表1に示した各時代の支配者層に位置する武士は皆、源か平を氏性として名乗る。ここで注目したいのは、明らかに源平二氏の系統ではない、

表1 源平交代思想の略図

政権	支配者	氏族
平氏政権	平清盛の一族	平氏
鎌倉幕府 (前期)	源頼朝の一族	源氏
鎌倉幕府 (後期)	北条氏 (執権)	平氏
室町幕府	足利氏	源氏
織豊政権	織田氏・豊臣氏	平氏
江戸幕府	徳川氏	源氏

織・豊政権における織田信長と豊臣秀吉、江戸幕府を開いた徳川家康である。この三名の武士は、明らかに源平二氏の系統ではないにも拘らず、源平の氏性をなけば強引に名乗っている。そして、この三人の武士は共通して、みずから「神格化」を望む点に特徴がある。

V. 神格化を望む天下人における共通認識——「道」と捉えて——

戦国時代の三傑といえ、一般的に織田信長・豊臣秀吉・徳川家康である。この三人は天下人と称されることも多い。この三人の功績をなぞらえて詠まれた歌の一首を以下に記す。

「織田がつき、羽柴 (豊臣) がこねし天下餅、座してくらうは徳川」(傍点部筆者)

以上に記した歌からも理解できるように、この三人には天下統一へ向けた動きの連続性がみられる。また、戦国時代以前の武士にはみられない共通性がある。それが自ら「神格化」を望む点である。これまで日本には英雄信仰といった信仰形態があり、スサノオノミコトの「ヤマタノオロチ神話」や神武天皇の「神武東征神話」などといったものがそれにあたる。また、荒ぶる神として、崇徳上皇や平将門といった「怨霊信仰」などもみられる。このように古来より日本では人が神として祭祀されることは珍しくない。しかし、これらはその人物の死後に他者が祀っているのであり、みずから望んで神格化したのではない。

では、なぜこの三人はみずから神格化を望んだのかというと、天皇の持つ「神聖性」に匹敵するものを自身に付与するためであり、それが自身の神格化であったと考えられる。

天下統一の先駆者であった織田信長について触れる。信長は、

足利義昭を將軍職へと押し上げはするが、義昭からの副將軍任官の打診を拒否する。また、時置かずして將軍・義昭を対等以上の立場を求めようになる。そして、氏性を平氏と名乗り、足利氏に加担する延暦寺や石山本願寺らを弾圧し、足利義昭を追放して室町幕府を滅亡させる。そして自身を「第六天魔王」と称し、安土に城郭を築き、そこに「見時」を建立する。この「見時」に祀られているのは、信長自身であり安土に住む人々には信長の誕生日に礼拝させるといふこともおこなっている。これは、池上氏も同様に指摘している。

「なんとかして朝廷の官職体系の中に取りこもうとする天皇側の働きかけに応じなかった。フロイスによれば、信長はみずからが神として万人に礼拝される存在となることを望んでいたといふ¹⁶⁾」

自分の誕生日に礼拝させるといふ点には、信長が加護したキリスト教の影響も感じられる。また、信長の居城でもある安土城の構造や名称からも信長が天皇の持つ権威を超える存在を意識していたことが理解できる。城主の住む間を従来は天守というが、信長の住む間を「天主」と名付け、天皇を住ませる間である御幸の間よりも上座に設けるなどといった形で、可視的に天皇を超越する存在をアピールしている。池上氏も以下のように指摘している。

「天皇から民衆までを圧倒した信長が、天皇や日本の神仏の上に立つ存在たろうとして不思議はない¹⁷⁾」

「日本の『国王』となり、東アジア世界の皇帝を夢みた信長は天主にその思いをこめるとともに、摠見寺をその西に、しかも下位に造ることによって、民衆に現世の幸福をもたらす神としての自己をも創出するに至った。そうして、世俗世界と宗教世界の二つの頂点に立つ自分を可視的に位置づ

けた¹⁸⁾」

以上の指摘からも、信長自身が神格化を望み、天皇を超える存在として権力と権威を掌握しようとしたことが理解できる。

次に、信長の亡き後、天下人としての後継者について豊臣秀吉について触れる。豊臣秀吉は生い立ちや出生地に関係なく、平氏を名乗った。特に、秀吉に限っては農民の出身であるにも関わらず、名を変えながら出世し、最後は「豊国大明神」という神号までつけている。秀吉の出生について『太閤記』に以下のような記述がみられる。

「或時母懷中に日輪入給ふと夢み、已にして懷妊し、誕生しける¹⁹⁾」

以上の記述からも理解できるように、夢を介して日輪が母の胎内に入り、懷妊するといった伝説がみられる。上に示した記述にみられる日輪が天照大神を指すかは定かではないが、太陽神である天照大神に何か関係しているものであることは容易に想像がつく。こういった伝説を背景に、秀吉自身の血統の優位性を確保しようとする。

秀吉は、信長の生前における強引な神格化への動きとその失敗を目の当たりにしていることもあってか、秀吉自身が天皇を超越する存在になることは目指さない。むしろ、積極的に朝廷の官職体系の中に潜り込んでいこうとする。ここには、信長の臣下であり後継者であるという立場が、天下人である秀吉をもってしても克服できない弱みであったと考えられる。これは、少し長くなるが、池上氏の指摘を参考としたい。

「信雄・家康との講和は右のことと密接に連関してとられた方針である。武力での撃破は困難とみて、武力にかわる優位性の追求、支配の論理の追求がはじまった。それには朝廷官位の利用しかなかった。信長も一時は利用し、しかし途中で棄てた手段

である。ここに秀吉は信長の路線と訣別し現実路線に乗り換えた。家康の二男を養子に迎えたのも見逃せない。十二月末には毛利輝元の娘を養子の秀勝に娶せた。これは備中高松での和議以来進めてきた毛利との京芸和平交渉の成果ではあったが、これにより東西の大大名と縁戚関係を結んで、軍事的な敵対関係の解消をはかった。というよりは、彼らから敵対・拳兵の名分を奪ったのだ。もし彼らが秀吉に敵対すれば、一種の人質を差し出した形の彼らが、公卿に列して朝廷に忠勤を励む秀吉を裏切った形になることは避けられない。そうしておいて、その間に官位を進め、政権の基盤を固めるのである。その目論見は早くも翌十三年のうちにほぼ達成される。すなわち、紀伊・四国・越中の平定と関白就任が実現する²⁰⁾」(下線部筆者)

以上の記述における下線部からも理解できるように、秀吉は信長のように武力的権力をまだ掌握しきれていない時期に、信長の後継者として天下人になった。よって、信長のように生前から生ける神としての神聖性・優位性の確立は困難であった。よって、生前は『太閤記』にあるように、日輪の子という描写を用いて、間接的に皇族との関係を想起させるに留まっている。自身の死後に、豊国大明神という神格化を果たして、護国と豊臣家繁栄の神となろうとした意図がよみとれる。

次に、織田・豊臣と続いた天下統一への道を完結させるに至った、徳川家康について触れる。家康は江戸幕府を開き、江戸時代という天下泰平の世を確立したが、生前は秀吉同様、神格化への動向はみせない。それよりも幕藩体制下における制度上の整備と朝廷との関係に対する政治上の規制といった動向が主である。しかし、家康も死が目前に迫ったとき、側近である本多正純と崇伝と天海に遺言として、自身の死後における埋葬の手順と神格化への勧請まで指示している。この事実から窺い知れることは、自身の死をもって神

格化へのステップとなし、秀吉と同様に、護国と徳川家繁栄の神になろうという意図である。また、この家康の考えは江戸幕府の歴代将軍によって固く守られ、そこに神道や仏教といった宗教的権威も含有した形として確立し継承されていくこととなる。

曾根原氏の指摘からも理解できるように、江戸時代という天下泰平の世となると徳川幕府は、家康という人物を東照大権現という神として日光東照宮に祀り、天台宗の高僧である南光坊天海と吉田神道²¹⁾の祠官によるはたらきかけをもって、伊勢神宮(皇大神宮)の祭神・天照大神との関係を深め、徳川幕府は徳川一族の血統的優位性を確保しようとした²²⁾。

以上のように、天下人といわれる三人には、生前か死後かという多少の異同はあるが、みずから神格化を望む点に共通性がみられる。また、それは世俗的権力である武力のみの統治ではなく、そこに宗教的権威である神聖性を兼ね備えた統治スタイルを確立しようとしたことが共通してみられる。このような動きは戦国以前にはみられない。また、信長・秀吉・家康という流れで常に主権者の側に仕えながら、事をなすにあたっての手段の反省と改善を模索しながら、江戸時代約300年近くにも及ぶ武士社会の礎を築いたといえる。ここに近世における泰平の世の武士道へと続く土壌があり、この三人の思想や政策には一連の連関がある。これを「道」と捉えることができると思う。

VI. 武士道思想と「神話的イメージ」

各々の時代の武士の思想と宗教との関係性を考察したとき、各々の時代にみられる武士の思想或は権威を形成するものとして「神話的イメージ」が関わってくるように思われる。

まず、「神話的イメージ」という用語は、湯浅氏がその著『歴史と神話の心理学』²³⁾で使用されたものであり、さらに酒井氏もその

著『日本精神史としての刀剣観』²⁴⁾の中で使用されている。本論は両氏の研究に多大な示唆を受けたものである。特に、酒井氏の研究・講義から受けた示唆は非常に大きいことをまずここに明記しておきたい。

酒井氏は、神話的イメージについて以下のように述べている。

「特に古代神話において形作られたイメージというものは、ある種の非常に強い力をもっており、これが後世の思想形成に多大の影響を与えている²⁵⁾」

本論は以上に示した酒井氏の指摘をもとに考察をすすめることとする。

まず、中世における武士は戦闘が生業であり、合戦・殺人が活躍の場であった。このような殺人集団が唯一、正当化されるのが朝廷の軍隊であることである。これは、酒井氏も同様に指摘している。氏の指摘を以下に記す。

「武というものは根本的に人を殺すことであり、生命の否定である。これが正当化されるのは唯一、朝廷の軍隊（官軍）であるということであった。天皇の名の元での武力行使であることが、彼らの行為の正当化を保証するものであり、ひいては彼ら武士集団の存在意義にも関わることであった²⁶⁾」

以上の指摘からも理解できるように、武士にとってその武力の行使には誰もが納得する大義名分が必要である。これを示すものが、朝廷の軍隊という天皇による保証である。そして、このような武士を統率する者として桓武天皇の子孫である平氏と清和天皇の子孫である源氏という源平二氏が台頭してくる。この二氏が後に武士道思想に多大な影響を及ぼすこととなる。ここで重要なことは源平二氏の血統が天皇の血筋であるということである。

これ以降、源平二氏を中心とする武士の時代が長く続くこととなるが、武士はどの時代

においても源平の血筋や天皇、三種の神器といったものに強く固執するようになる。

酒井氏は、武士が三種の神器を重要視していたことを指摘している。氏の指摘を以下に記す。

「平家、源家ともに、執拗なまでのこだわりであり、三種の神器に対する執念すら感じる。最初は策を巡らしながら三種の神器を返還させようとするが、これも果たせず最後は神頼みをする。興味深いのが、戦況が有利な方がこういった行動に出ているということである。つまり、勝ち戦であっても三種の神器にはこだわりがあった。そして平家側は絶対にこれを手放さなかった。両軍いかにこれを重視していたかが窺える²⁷⁾」

さらに、皇位の象徴として三種の神器像について、氏は以下のように指摘している。

「三種の神器が皇位の『象徴』であることは、平安朝以前において既に確認した。ただ、その象徴性は、社会に果たす機能として大きくないことも確かであった。しかし、この時代に至っては、武家社会をも巻き込み、且つ皇位に優先する程の扱いをされ、かくも重視されていることからして、その象徴性が非常に高かったことは間違いない²⁸⁾」

氏の指摘からも理解できるように、武士側からみる皇位の象徴が、天皇自身から三種の神器へと移行していることがわかる。

源平争乱の戦乱が終り、源氏或は東国の武士を中心とした武士の思想・社会が形成されるに至って、源頼朝はまず、伊勢大神宮に願文を奉納している。その内容を簡潔に述べると、源氏の武力が平氏方に勝っていたために戦乱を勝ち抜けたのではなく、「神の冥助」「天運」があったためとし、神に感謝している。さらに、鎌倉の守護神として八幡神を崇

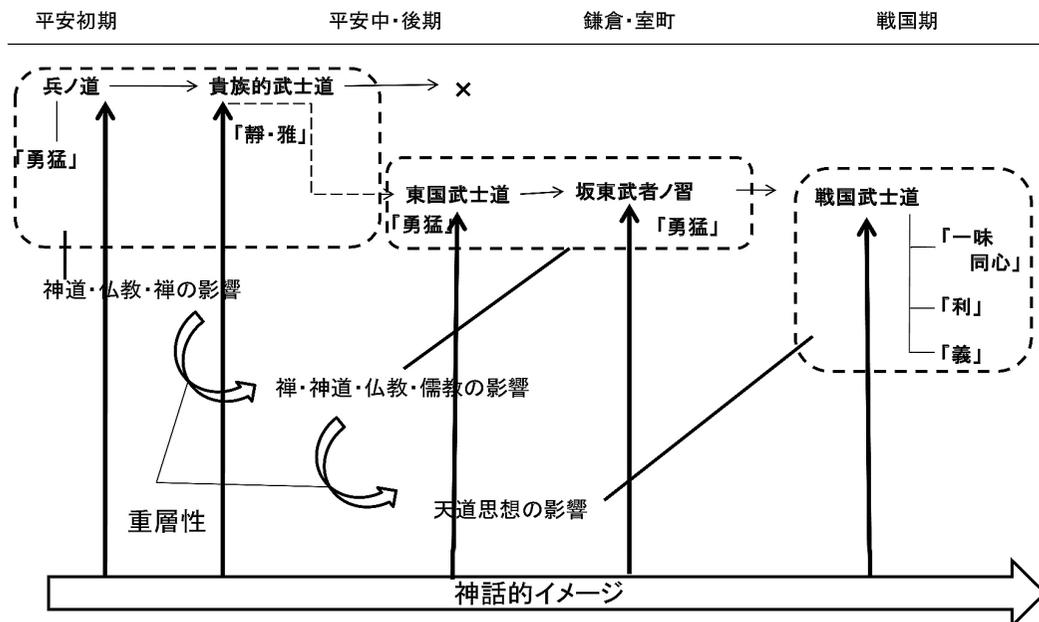


図2 武士道思想における死生観の変遷と宗教的背景

拝し、信仰している29。この八幡神への信仰は、東国武士道や坂東武者ノ習といった武士道思想の中でも非常に大きな影響を与えていることは明らかである。

この頼朝の行動は、神武天皇の神武東征神話にみられる戦勝の勝因をタケミカズチ神の助けによるものと感謝し、東国の鹿島にタケミカズチを祀った30という描写と非常に類似している。ここに、東国武士道或は坂東武者ノ習の思想形成に神話的イメージによる影響が窺える。

以上のことから、武士道思想において武士集団のトップや勢力図が変わるたびに武士の血統の優位性や新たな思想形成に古代神話にその起源を求めようとする「神話的イメージ」による影響がみられる。これを鳥瞰図的に示すと以下の図2ようになる。(図2)

VII. おわりに

これまで、戦国乱世における武士の思想を中心に「神格化」をキーワードとして考察を

おこなってきた。

武士の精神文化形成における時代的構造的特徴から、宗教との深い関わりを見出すに至り、さらに「下剋上」における武士道思想の変化と天道思想の影響を明確にした。

そして、従来の武士道研究では指摘されてこなかった天下人の思想に着目するに至り、その「神格化」の背景理由から武士道思想における天下人にみられる立場の特殊性を明確にすることができたと考える。また本論で述べた「下剋上」から「神格化」への連関をもとに、さらに近世の新しい武士道思想である「士道論」への発展と展開については今後の課題としたい。

【注】

- 1) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第十二巻, 小学館, 2001.
- 2) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第十二巻, 小学館, 2001.

- 3) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第十二巻, 小学館, 2001.
- 4) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第十二巻, 小学館, 2001.
- 5) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第十二巻, 小学館, 2001.
- 6) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第十二巻, 小学館, 2001.
- 7) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第十二巻, 小学館, 2001.
- 8) 『平家物語』下, 日本古典文学大系 32, 岩波書店, p.342, 1959.
- 9) 本論における武士道思想の重層性という考察は、酒井氏の著書『日本精神史としての刀剣観』における「日本刀剣観の体系」の中で述べられている重層性の論理に非常に示唆を受けたものである。
酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房, 2005.
- 10) 湯浅泰雄『神々の誕生』以文社, p.18, 1972.
- 11) 曾根原理『神君家康の誕生』吉川弘文館, 2008.
- 12) 曾根原理『神君家康の誕生』吉川弘文館, pp.29~30, 2008.
- 13) 曾根原理『神君家康の誕生』吉川弘文館, p.30, 2008.
- 14) 曾根原理『神君家康の誕生』吉川弘文館, p.33, 2008.
- 15) 源平交代思想とは、日本史上において武家政権は源平二氏が革命的に交代するという考え方である。
- 16) 池上裕子『織豊政権と江戸幕府』日本の歴史 15, 講談社, p.129.
- 17) 池上裕子『織豊政権と江戸幕府』日本の歴史 15, 講談社, p.129.
- 18) 池上裕子『織豊政権と江戸幕府』日本の歴史 15, 講談社, pp.129~130.
- 19) 桑田忠親校訂『太閤記』岩波書店, p.71, 1943.
- 20) 池上裕子『織豊政権と江戸幕府』日本の歴史 15, 講談社, p.142.
- 21) 『広辞苑』に「神道の一派。室町後期に京都吉田神社の祠官吉田兼俱が唱道、仏教・儒教・道教などを融合し、日本固有の神道を主張。天照大神・天児屋根命から直伝・相承した絶対的本質的な神道の意から、唯一宗源神道・唯一神道・元本宗源神道などともいう。ト部神道」とある。
- 22) 曾根原理『神君家康の誕生』吉川弘文館, 2008.
- 23) 湯浅泰雄『歴史と神話の心理学』思索社, 1984.
- 24) 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房, 2005.
- 25) 酒井利信「刀剣の歴史と思想」『月刊 武道』通巻 516 号所収, (財)日本武道館, p.50, 2009.
- 26) 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房, pp.380~381, 2005.
- 27) 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房, pp.238~239, 2005.
- 28) 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房, p.240, 2005.
- 29) 鍛代敏雄『神国論の系譜』法蔵館, p.43, 2006.
- 30) 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房, p.174, 2005.